立命館大学体育会ソフトテニス部の歩み　1919-2019

…「立命館」の草創 …

明治の開国によって西欧文化・文明を急速に吸収し、近代国家への道を歩み始める一方で、戦争体験を通じて、平和の大切さを実感した時代でもあった。

日本社会が、急激な変化を示したころ、本学園も産声を上げた。1869（明治2）年、西園寺公望が開いた私塾「立命館」は、翌年に短い生命を閉じたのだが、勉学の気概に燃える若者が無為に過ごす姿に心を痛めた中川小十郎は、意を決し、西園寺の意思を引き継ぎ、1900（明治33）年、夜学校「京都法政学校」を開校した。そして、自由清新な学園の礎を築かれていった。

（立命館創始 130 年・学園創立 100 周年記念写真集より）

… 軟式庭球の発祥とソフトテニス …

ヨーロッパで生まれたテニスが日本に伝来したのは、1879（明治12）年、体操専門教師養成を目的に設立された政府公立の体操伝習所において、アメリカから指導者として招聘されたG.Aリーランド氏が、様々な運動器具を持ち込み、新しい運動を導入していった中に「ローンテニス」があったと言われる。

1884（明治17）年、この体操伝習所においてG.Aリーランド氏の通訳を務めた坪井玄道氏（後に我国の学校体育の基礎を築く）が、ゴム球を使用し「ローンテニス」の手ほどきをしたのが、「日本テニス」の発祥と伝えられる。

1884（明治21）年、東京高等師範学校（現筑波大学）に庭球部が創設され、1897（明治30）年、三田土ゴム会社が創製したゴムボールによるテニスがその学生に伝えられた。彼等は、卒業後中等学校、高等専門学校に赴任し、仲間同志のプレーや生徒に指導する中で軟式庭球は、全国的に急速に普及することとなった。

… 軟式庭球部の創設期から第一期黄金時代へ …1919-1945

前衛と後衛のチームにより、選手の協調性と綿密な計画性、そして、機敏な動作が高度に要求される頭脳的な競技として、大正時代初期に急速に発展した軟式庭球。

我大学においても、校名を「立命館大学」と改称し、全国校友会が結成された1919（大正8）年、他大学に遅れをとることなく、軟式庭球部の創設に至った。

昭和に入り、部としての活動も活発になり戦績も上昇してきた。1921（S10）年には、第7回全関西学生選手権（現在の西日本学生）において、稲本・花房が初優勝を果たすとともに、明治及び伊勢神宮大会（国体の前身）の出場権を得るなど、着実に全国的な実績を積み重ねていった。

我部のOB会「命友クラブ」の初代会長を務められた清水（旧姓薮内）九助氏等のこの頃の努力が実り、第一期黄金時代の基礎が培われた。

日本軟式庭球界の歴史に名を刻む強豪八木・呉が、1939（S14）年に全日本学生軟式庭球大会で優勝、翌1940（S15）年には、第12回全関西学生で優勝さらに第5回全日本大学高専軟式庭球大会での準優勝など数々の輝かしい戦績を挙げ、いよいよ「関西に立命館あり」とその名を全国に轟かせる第一期黄金時代を築くこととなった。

… 終戦から古豪復活の第二期黄金時代 …1946-1951

終戦後の1946（S21）年、第一回国民体育大会が京都を中心に開催され，これを契機にスポーツ界、そして、軟式庭球界もその再建に立ち上った。

我部も、左京区川端通荒神口の関西配電「荒神口コート」において刻苦精励し、戦前に続いて学生界で頭角を表した。

1947（S22）年には、学生東西対抗戦に監督経験もある中川昇一郎氏を始め服部光男選手、野口正雄選手、岩崎正之選手が、西軍を代表して出場した。

1948（S23）年以降の学生東西対抗戦には、命友クラブの会長を務めた柴田種次氏や永年監督として尽力をされた岩崎太美夫氏（1964（S39）～1975（S50）年度に監督）とともに、池田昭三選手、寺井慶三選手等が歴年出場。ここに、戦前の古豪復活、第二期黄金時代が到来した。愛媛県の中條利行氏もこの時代の立役者である。なお、第二期、第三期黄金時代において忘れてはならない方は、1951（S26）年卒業の中川昇一郎氏である。1961（S36）年から2年間監督を務められたが、選手に対し、物心両面にわたり援助し「嵐山の中川先輩」として慕われた。

… 躍進の第三期黄金時代 …1952-1959

全日本大学対抗に文部大臣杯が下付され、ゲームは7回から9回に改められた。1952（S27）年の春、岡山・伊東徹氏、大阪・天野敏夫氏を始めとする有力選手が入部し、立命館の怒涛の活躍が始まった。また、京都出身、現在東京在住の高橋勉氏（命友倶楽部顧問）も同年入部で、選手として活躍すると同時に、体育会本部委員長の重責も果たされていた。

1954（S29）年度は、桜井正人主将、飯田修主務。全日本大学対抗ベスト8（天野・加藤、伊東・落合、桜井・星野）、以後3年間続けて全日本大学対抗ベスト8に進出した。

1955（S30）年度は、伊東徹主将、飯田修主務。関西六大学春季リーグ戦優勝に続き、天野・加藤による西日本学生及び近畿体育大会での優勝、伊東・星野の関西学生及び関西学生選抜での優勝等々、大小合わせて年間18に及ぶ優勝杯を獲得した。また、西日本学生ではパッキンから勝ち上がった高橋勉・児玉がベスト8に進出し、準々決勝で優勝した天野・加藤を苦しめる善戦を繰り広げた。体育会委員長の高橋勉氏と京都学連理事長の児玉康成氏のペアの活躍は、当時の選手層の厚さを物語る。

1956（S31）年度は、星野資主将、川崎哲郎主務（命友倶楽部会長）。西日本学生大学対抗で3位、全日本大学対抗でベスト8に進出した。

1957（S32）年度は、縄田哲男主将、川崎哲郎主務の体制のもとで、阿久津・縄田が西日本学生で優勝、全日本学生選手権3位と活躍した。また、当時2回生の高橋外選手は1回生の沖選手とのペアで西日本学生3位に入賞している。西日本及び全日本学生では、高橋章・水野、田中・垣見、藤井・深見らも活躍、関西新進では竹之内・安田が3位に入賞するなど、選手層の厚い顔ぶれが揃った時代であった。

1958（S33）年の高橋章主将、川崎庄一郎主務で臨んだ長野県上田市営コートにおける全日本大学対抗では、高橋外・沖が大活躍して準優勝。この大会のレギュラーには、高橋章主将はじめ、垣見恵一選手（命友倶楽部副会長・前東海支部長）、梅垣時男選手（命友倶楽部副会長）、水野琢璽選手など歴史に残る名選手が名を連ねる。高橋外・沖は関西学生に優勝、西日本学生3位。シングルスでは、高橋外が関西、西日本とも制覇した。

1959（S34）年、梅垣時男主将・川嵜庄一郎主務で戦った全日本大学対抗は準決勝で早稲田大に梅垣・垣見が1勝するも惜敗、3位に入賞した。西日本では大学対抗3位、ダブルスは、高橋外・沖が準優勝し、シングルスも高橋外選手が優勝、梅垣主将が3位と上位を占めた。関西学生では高橋外・沖が優勝し2連覇を果たし、シングルスでは梅垣選手が準優勝した。団体・個人を通じ、正に史上最強の第三期黄金時代を築いたと言える。

そして、この年、永年慣れ親しんだ関西電力の「荒神口コート」に別れを告げ、鴨川や比叡山・大文字を望む広小路体育館の東側に待望のホームコート「鴨川コート」が整備され、ここを拠点に練習に励むこととなる。

… 個性派選手が揃う「安定の時代」へ …1960-1968

この時期（1957年頃）、立命館大学はスポーツ推薦制度を縮小廃止（一部の体育会は実施）したが、軟式庭球部には実力のある選手が入部し続けた。

1960（S35）年度は、現役時代に4年連続の東西対抗出場を果たした沖主将、森川主務（命友倶楽部副会長）を中心に、前年から始まった関西学生リーグ戦の1部において、存在感を発揮し続けた。

1961（S36）年は、黄倉主将が稲垣主務とペアで大将として西日本大学対抗3位。

1962（S37）年は、寺田主将、鈴木主務の体制で、大将の寺田・林に新進気鋭の小田・川畑が加わり、西日本大学対抗3位。団体戦では、立命館大学らしさを発揮し、その後も上位入賞を続けた。

1963（S38）年度は、山田主将を中心に1部リーグを守り続けたが、この時代に個性派筆頭と言える鈴東氏（命友倶楽部会長代行）も立役者としての存在を発揮した。

1964（S39）年度は、寺沼主将、燃杭主務。チームの大将小田・福田が踏ん張り西日本大学対抗3位。秋に岩崎太美夫監督が就任し的確なアドバイスを展開する。

1965（S40）年度は、小田主将（1976（S51）年～1983（S58）年監督）と中村主務で、スポーツ推薦制度が廃止されていたが、新たに坂根、堀切、川端、福岡、五十嵐と立命館高から松見、丸山、山下が入部。西日本大学対抗では3年連続の3位入賞となった。

1966（S41）年度は、九嶋孝主将と「名主務」と歴史に名を刻む池田主務で春季リーグ戦に臨むが、小田・福田を始め主力選手の卒業が響き6位。逆瀬川コートで行われた入替戦で大経大を破り1部に残留した。

1967（S42）年度は、若林主将と池田主務の体制で、4回生の水野、3回生の坂根、堀切、川端等の充実したメンバーに新入学の吉岡、竹島、安永等が加わり選手層が厚くなる。関西学生新進で堀切・吉岡が優勝、坂根・川端が3位。関西学生シングルスでは、安永が3位。全関西選手権でも、坂根・川端が優勝。西日本大学対抗は、坂根・若林を大将に3位の戦績を挙げ、「立命館は団体戦になると力以上のものを発揮する。」との定評どおりの活躍であった。

1968（S43）年度は、川端主将とプレイングマネージャー松見主務（命友倶楽部副会長）、層の厚い4回生の活躍で1部リーグを死守した。ダブルスでは、西日本学生で堀切・吉岡がベスト8。この時代、東西対抗には、坂根（命友倶楽部副会長）、堀切、吉岡が出場した。

… 初めて味わう「忍耐の時代」 …1969-1970

1969（S44）年～1971（S46）年頃は「忍耐の時代」であった。団塊の世代の受験戦争が厳しくなったこの時期、各大学ともスポーツ推薦制度枠を縮小する傾向にあり、前述のように立命館大学はいち早くスポーツ推薦制度を廃止していた。一方、他の私立各大学は従来通り継続しており、スポーツ推薦制度を拡大した天理大を始めとする新たな勢力が大量に選手補強を行い始めた。

1969（S44）年度の春季リーグ戦は、レギュラー8人の卒業の影響で金光主将、藤本主務が踏ん張りを見せたが、永年維持した1部リーグの伝統を支えることが出来ず2部リーグへと転落した。なお、全国的な大学進学率向上も相俟って、選手確保が一層厳しい状況となり、金光主将は、藤本主務とともに古豪復活への道筋として、立命館高校からの内部進学に着目して勧誘活動を展開、1970（S45）年度に井上、谷出が入学、以後9年連続で立命館高校からインターハイ出場レベルの入部が実現した。

1970（S45）年度は、竹島主将・九嶋修主務。高田、長井とともに4回生の名手・吉岡の奮闘が歴史の中に光る。西日本学生のダブルスで竹島・吉岡がベスト8、シングルスも上位に食込む活躍をした。なお、竹島主将の実兄は、中央大OBで天皇杯覇者の竹島選手である。この年の新入部員に井上（立命館高）、谷出（立命館高）、主力後衛加藤清の弟である加藤素（一宮西高）、そして野村（一宮西高）、千葉（桃山高）、吉武（佐賀北高）と技術力のある選手が入部した。しかし、秋季リーグ戦では2部リーグでも最下位となり、3部リーグへ転落するなど事態は深刻さを増し、体育会軟式庭球部の「忍耐の時代」が始まった。

＜当時のエピソード＞竹島主将が、大学受験で1966（S41）年を京都に訪れ、鴨川沿いを歩いていた時、堤防のグランドで軟式庭球の練習をしていた中学1年生を見て中学生を指導、楽しいひと時を過ごして帰った。その3人は立命館中学生で、後にインターハイに出場、大学に進学し4年間レギュラーとして活躍した早瀬、可知と後に監督になった水田だった。

… 古豪立命館の復活を胸に …1971-1975

1971（S46）年度は、吉川主将（朱雀高）と安田主務（刈谷高）。吉川主将は、1回生の時に1部リーグのレギュラーで出場し、当時「最後の1部経験者」と言われた。新入部員は村上（立命館高）、野村修（桜宮高）、他に入部した選手は途中で退部した。春季リーグ戦に優勝したが、2部昇格はならず、秋季リーグ戦は2位だった。また、この年に3人の女子部員が誕生したが続かなかった。

1972（S47）年度は、與田主将（伝習館高）と近田主務（岡崎高）。新入部員に立命館高から早瀬、可知、水田。そして、大河内（赤穂高）、芝辻（宇部高）、服部（西尾高）、少し遅れて前田（泉陽高）が入部した。春季リーグ戦は、3 部 3 位。秋季リーグ戦は、2 位だった。

1973（S48）年度は、野村幸主将と吉武主務。野村幸主将が指導力を大いに発揮し、技術面の向上だけを目指すのでなく、理論的な攻撃力を追求する中で、2部リーグ復帰の気運が高まった。新入部員は、松田（立命館高、命友倶楽部事務局長）、永石（鹿島高）、三浦（徳山高）、そして、1971（S46）年度の京都府高校女子ナンバーワンの小林（山城高）。春季リーグ戦は、1位で入替戦に臨むも桃山学院大に屈し3部残留となった。

この時代に、OBとの連携などに大きな役割を果たしたのは、社会人経験を持つ近田主務をはじめ、吉武主務、野村修主務であった。3人の主務が流した貴重な汗が大きな影の力となっていた。

1973（S48）年の秋季リーグ戦では、2回生の水田（1983（S58）～2019（H31）監督）が主将となり、卒業

前の野村幸・谷出、加藤・千葉、2回生の早瀬・可知、大河内・前田、水田・服部で3部リーグ5戦全勝。入替戦で龍谷大学を③-1で倒し、3年6シーズンぶりに2部リーグへの復帰を果たした。

1974（S49）年度は、女子部員の2回生小林が主務となり、2部に復帰したチームを統括する。また、4回生となった村上が復帰し、水田、早瀬を後衛に関西・西日本・全日本学生でベスト16・32・64の戦積を残した。この年の新入部員は、日体大を経由して入部した大杉（立命館高）、西村（下松高）、女子は岩国高から白銀、柳屋。春季リーグ戦は、誰も2部リーグ経験がないメンバーで臨み、部員数も少ない中で厳しい戦いが続き、最終戦の5番勝負で西村・可知がファイナルデュースを何度も繰り返して勝ち、ようやく5位。秋季リーグ戦は4位だった。

1975（S50）年度は、早瀬主将、主務は引き続き小林。新入部員に立命館高から水田博、北川真、広田、そして、小川（和泉高）、和田（和泉高）、池原（福山誠之館高）とインターハイ選手4名を含むレベルの高い層が集まる。春季リーグ戦は4位。秋からの幹部は永石主将、主務は3年目となる小林。なお、この年、1964（S39）年度から監督を務めた岩崎監督から柴田監督（元命友クラブ会長）に交代した。秋季リーグ戦は4回生も出場し3位だった。

… 明るさを取り戻した「充実の時代」 …1976-1980

1976（S51）年度は、主力5人の卒業により、チームに大変な緊張感が走ったが、永石主将、松田副将（命友倶楽部事務局長）、大学から初心者で始めた三浦の粘りや小林主務のマネージメントが光った。部員は、深見（立命館高）、渡部（新居浜西高）、畦（呉三津田高）、佐々岡（東住吉高）、大胡（伊東高）、山崎（天城高）、そして女子の山本（城北高）が新しく入部。春季リーグ戦は2位。秋からは、柴田監督から1966（S41）年卒業の小田監督にバトンタッチし、同時にチームの大黒柱の西村主将と存在感溢れる大杉主務で秋季リーグ戦を戦ったが、最下位を決定する最終戦で2対2の天秤となった。卒業前の三浦・永石が4回生の最後を締めくくる試合にゲームカウント0－4の絶体絶命の劣勢。そこからの底力でファイナルデュースまで縺れ込み何度もマッチポイントを取られながらも大逆転勝利、2部残留を決めた精神力は、「団体戦に強い」と言われる立命館大学の歴史を物語るものであった。勝利を決めた直後にベンチへ戻った三浦がソーっとラケットを置き、「もう、二度とラケットは持つま…。」と発した山口弁が、笑いと感動の涙を誘い、一つになったチーム全員に広がった。（三浦は、1957（S45）年卒の名選手、竹島の親戚である。）

この時期、スポーツ推薦がない中、一般入試や内部進学でインターハイ等に出場した選手が次々と入部、選手層も厚くなっていった。

1977（S52）年度、新入部員は上島（郡山高）、谷村（郡山高）、槌谷（富岡西高）、庄林（立命館高、元コーチ）、竹田（立命館高）。春季リーグ戦は2位だった。秋からは、実力派の前衛小川主将と主務道に拘る広田主務。関西六大学秋季リーグ戦で有名選手の揃う同志社大と3－3の天秤までもつれ込み、最終戦は2回生深見と1回生上島の若いペア、ファイナルは2人ともフルスイングのレシーブで相手を圧倒し、宿敵同志社に勝利した。また、この勝利の背景には、畦、庄林、槌谷、谷村らの実力のある選手達がレギュラーを争っていたことを忘れてはいけない。

1978（S53）年度は、新たに金田（西脇高）、北川青（立命館高）、北野（飯田高）、釼木（山口高）の部員が入部。春季リーグ戦は小田監督のもと、水田博・小川、和田・池原、大胡・渡部を軸に、北川真・上島、深

見・広田・槌谷のメンバーで臨み2部リーグ優勝、1969年の2部降格以降初めての1部との入替戦となった。京都産大との入替戦には敗れたが、「一部復帰」が夢ではないと1981（S56）年秋まで2部リーグでの健闘が続いた。なお、池原のペア和田は京都学連の理事長として機関誌の発行を発案、この年に創刊された京都学連機関誌『コートサイド』は現在も発刊され続けている。秋からは、渡部主将、佐々岡主務で秋季リーグ戦に臨み5位。

1979（S54）年度は、池上（洲本高）、杉野（関西大倉高）、鈴木（松阪高）、竹村（郡山高）、武本（葺合高）、谷（岸和田高）、西木（泉陽高）の新入部員を迎え、春季リーグ戦は5位。秋季リーグ戦は、上島主将、竹田主務で臨み4位。

1980（S55）年度は、新入部員に鶴田（修猷館高）、寺口（泉陽高）、大野（泉陽高）。春季リーグ戦は4位。秋からは、金田主将、釼木主務がチームをまとめ、秋季リーグ戦を2位。個人戦では、関西、西日本ともにベスト 16 に進出した金田・槌谷が関西学生選抜インドアに出場した。

…「 苦難の時代」から再建・復興へ …1981-1986

1981（S56）年度、立命館大学衣笠一拠点計画の完了に伴い、練習場も21年間の思い出を残し、「鴨川コート」に別れを告げ、「衣笠西コート」に移った。この年に仰木（門司高）、藤田昌（淳心学院高）が入部。この新入部員が苦難の時代から再建への足掛かりを築くことになる。春季リーグ戦は4位。秋季リーグ戦を杉野主将、竹村主務で部員が一丸となって懸命に食い下がるも2部リーグ最下位。入替戦では、大阪教育大に敗退し3部リーグに降格した。

1982（S57）年度は、新たに佐藤（立命館高、命友倶楽部副会長）、藤田智（立命館高）、宮地（高槻南高）、柳田（舟入高）という確かな技術力の選手が入部。しかし、春季リーグ戦は3部でも最下位となり、入替戦で神戸学院大に敗退し4部リーグとなる。秋は寺口主将、大野主務でクラブ初の4部リーグに挑戦するが、最下位となり3シーズン連続で入替戦。何とか仏教大との対戦は、③－2で勝利し4部に残留した。

1983（S58）年度も前年に引き続き充実した新入部員、井上（姫路東高）、清住（広島新庄高）、谷（高田高）、長山（神戸高）、前野（桂高）、山口（三島高）、一谷（高槻南高）が入部しムードは高まるが、春季リーグ戦も最下位で入替戦。対戦は、引き続き仏教大で③－2で勝利し4部残留。2－2の天秤で回ってきたのが、1回生長山。その「闘志丸出し」の戦いが、忘れかけていた「立命館魂」を甦らせる契機となった。

この直後に小田監督を引き継ぎ1976（S51）年卒の水田が監督に就任。秋からは、仰木主将、藤田昌主務のペアで新幹部。秋季リーグ戦に向けてムード一掃のため部員全員が髪を切って挑んだ結果、5シーズンぶりに最下位を脱出し4位。また、新たに西岡（丸亀高）が入部したが、1981（S56）年度から数年に亘り入部した部員たちが、ソフトテニス部創部100周年を迎える「令和」の時代にも現役部員をバックアップし、命友倶楽部の結集に寄与する存在として活躍している。

1984（S59）年度は、新入部員が大西（葺合高）、鈴木（大曲高）、徳田（篠山鳳鳴高）、松尾（筑紫高）。春季リーグ戦は5位。秋季リーグ戦に向けた新幹部は、安定感ある宮地主将、迫力のプレイングマネージャー柳田主務のペア。リーグ戦は4位だったが、宮地・柳田、藤田・一谷、西岡・清住、井上・谷等が繰り広げた汗と涙に濡れた熱血漢溢れる死闘が、我部の再建・復興の基礎を築くこととなった。

1985（S60）年度は、インターハイ5回戦進出の常信（三田学園高）、稲田（尼崎小田高、命友倶楽部関東支部長）、喜多（綾部高）、北戸（奈良高）、黒澤（立命館高）、寺田（島本高、体育会委員長、現スポーツフェ

ロー事務局長）が入部し、春季リーグ戦は4位。この春季リーグ戦で伝説のシーンが誕生した。初日第3試合の和歌山大戦、5番に安定感ある4回生佐藤（命友倶楽部副会長）を抜擢。対戦は大接戦で2対2天秤。5番佐藤・長岡の試合は日没延期で翌日となり、深夜に素振りし集中するも睡眠不足で朝一番の対戦は瞬時に終了してしまった。命友倶楽部佐藤副会長の誠実さを披露した試合だった。秋季リーグ戦には、清住主将と西岡主務の大将ペアで幹部となり、最終戦まで全勝を続けるが、4勝1敗で2位。

1986（S61）年度は、新入部員として、島田（旭高）、長手（清風高）と女子部員の森本（宝塚西高）が入部。春季リーグ戦は5位。秋季リーグ戦は、松尾主将、徳田主務の幹部で戦い4位。この時期、4部リーグに甘んじていたが、京都学生では、前年に西岡・清住、この年に井上・常信が3位に入賞している。

なお、この時期から選手の指導の強化を図るため、「実業団の雄」と言われた京都市役所チームからベテランの脇野誠氏、前田右門氏（共に大阪商業大OB）をコーチ（ボランティア）として招き、大きな存在感を発揮して頂いた。前田氏はのちに女子部コーチ（現女子部監督）に就任、脇野氏には、男子が4部の時代から1部に昇格するまでの間、きめ細かな戦略や精神力・忍耐力などのアドバイスを頂いた。

… 新たな時代の幕開け …1987-1991

1983年に導入された入試制度「指定校推薦」は、指定された各高校において、文武両道で高校生活を頑張った受験生にも光が当てられた。学力優秀な選手が多く活躍する「ソフトテニス」においては、立命館大学を希望する選手たちに一つの新たな門が開かれた。

さらに、1987（S62）年度、立命館大学に「スポーツ能力に優れた者の特別選抜入学試験」（以下スポーツ選抜という）制度が導入された。スポーツ選抜の第1号は、愛知県1位の近藤（瑞陵高）（京都市役所チーム元主将）。また、立命館高から京都府1位の片山、川本（明石北高）が入部。春季リーグ戦は5位。秋季リーグ戦は、技術面・精神面でも関西学生界トップレベルと言われる常信主将と緻密さ及び包容力が売りの北戸主務で挑んだが4位だった。

1988（S63）年度は、スポーツ選抜第2号の中村（北嵯峨高）と松村（立命館高）、吉田（綾部高）という京都高校界のトップレベルが入部。同時に女子の山本（耐久高）、田宮（仁愛女子高）が入部し女子部創設に繋がった。春季リーグ戦は5戦全勝し、入替戦で大阪府立大を③－1で下し、3部昇格を実現。秋には、長手主将、島田主務が幹部。3部リーグ戦での長手主将の強気のオーダーが見事に的中し4勝1敗で優勝。入替戦も近畿大に勝利し、1981（S56）年度秋季リーグ戦以来の2部復帰を果たした。この入替戦で現役部員の大きな励みとなったのは、4部リーグの最も苦しい時代を経験してきた過去6年間の数多くの卒業生が応援に駆けつけてくれたことだった。この卒業生たちの多くは、現在も春・秋リーグ戦に駆けつけて現役を応援してくれている。

1989（H元）年度は、スポーツ選抜は、インターハイベスト8の森（明石西高）。そして、増井（明石西高）、中村（水口東高）、清水（牧野高）が入部。春季リーグ戦は、久々の2部リーグだが、勢いをそのままに突き進み2位に食い込む。秋季リーグ戦には、新幹部の近藤主将、川本主務で戦い、2部に残留した。

1990（H2）年度は、スポーツ選抜で森本・工藤（西宮今津高）がペアで入部。さらに京都府1位の牧野（立命館高）や寺田（関西大倉高）、仲野（清水東高）、北村（関西大倉高）、永崎（関西大倉高）が入り、この頃には、スポーツ選抜、指定校推薦及び附属校からの進学により入部する選手のレベルも向上し、一般入試の学生を含め有機的な連携を図ることのできる理想的なチームへと成長した。そして、リーグ戦も春季・秋季ともに2

部リーグで上位に定着した。秋からの幹部は、吉田主将とチームの大将である後衛の松村が主務を名乗り出た。

1991（H3）年度は、スポーツ選抜で東根（明石西高）、伊藤（高島高）が入り、小原（立命館高）、竹村（朱雀高）、高橋（葺合高）、西山（鳳高）が入部。春季リーグ戦は3位。大学対抗では、京都学生でAが準優勝、Bが3位と健闘した。秋は、森主将、増井主務の体制で、関西の大学の誰もが1部昇格を確信する布陣で挑んだ。牧野・森、松村・工藤、吉田・増井、中村孝・中村善の4ペアが安定した戦いで、初戦の近畿大には敗れたもののその後4連勝して優勝した。日を変えて同志社大学で同志社大との入替戦。1番牧野・森、2番松村・工藤が、同志社大の大将と2番手を圧倒して倒し、3番は敗退したが、4番、5番は2面展開で両チームともリードしマッチポイント（合計6本）を握るも逆転され、期待の1部昇格とはならなかった。改めて「一部リーグ」の目に見えない壁の大きさを実感する苦い経験であった。

… 第四期黄金時代への布石 …1992-1996

1992（H4）年度より、国際化を図るため「軟式庭球」から「ソフトテニス」へと改称され、それに伴いクラブ名も「ソフトテニス部」と変更した。

スポーツ選抜は、インターハイ団体準優勝の西村（三重高）、近畿団体優勝の武田（西城陽高）、清宮（橿原高）。そして、吉田（明石西高）、岩谷（立命館高）、徳田（滝川高）、沢村（関西大倉高）、森下（関西大倉高）、渋谷（大宮高）と新入部員も増加した。しかし、主力の卒業も影響し春季リーグ戦は4位。秋季リーグ戦は、工藤主将、仲野主務の体制で5位だった。

1993（H5）年度は、スポーツ選抜でインターハイ団体優勝の茂木（三重高）、湯通堂（明石西高）が入り、他にも田中（半田東高）、吉田（大）（関西大倉高）、田井（立命館高）、黒田（立命館高）が入部した。春季リーグ戦では4位、秋季リーグ戦は、東根主将、伊藤主務で優勝を目指すも3位。関西新人で武田・吉田が3位に入った。

1994（H6）年度は、国際競技規則の改正によりルールが大幅に変わり、前衛もサービスをすることになる。この年度のスポーツ選抜では、旧ルールの最後のインターハイで個人戦を制した峯田（鳥羽高）。そして、田中（姫路東高）、横田（朱雀高）、豊田（兵庫高）、馬場（関西大倉高）が入部。「一部復帰」も現実の課題と実感できる状態となった。春季リーグ戦は3位。西日本学生は、大学対抗で27年ぶりにベスト8、シングルスでも東根がベスト8に進出した。秋からは、吉田卓主将と徳田主務。秋季リーグ戦は4位。

1995（H7）年度は、スポーツ選抜で明石西高校からインターハイベスト8の岡村・広瀬のペアと辻本（三重高）に加え、堀（立命館高）、佐野（関西大倉高）、澤田（鳥取西高）、阪（姫路東高）、吉田（北嵯峨高）が入部。春季リーグ戦は3位。秋季リーグ戦は、茂木主将、田中主務の体制で3位だった。

1996（H8）年度は、高田商業高の楠征洋先生に水田監督が直談判し、大将ペアの岩本（現コーチ）・山本をスポーツ選抜で確保。そして、藤城（立命館高）、高田（関西大倉高）、養畑（舞子高）が入部。春季リーグ戦は、2部リーグ優勝を果たすが、入替戦で大阪経済大に1－③で敗退した。全日本大学対抗はベスト16。そして、秋からは、「1部復帰」宣言の峯田主将（現総監督）、プレイングマネージャー豊田主務の体制でチームを引締める。秋季リーグ戦は2位だった。

… 一部復帰から一部初優勝へ …1997-1999

1997（H9）年度は、スポーツ選抜で鈴木（桜宮高）、青木（高田商高）。そして、桝谷（西城陽高）、矢本（生野高）が入部。春季リーグ戦も2位。それぞれ個人戦で着実に戦績を伸ばし、秋季リーグ戦に向けて後衛の主軸の岡村が主将、前衛の要の堀が主務に就任。2部リーグを岡村・広瀬を大将に田中・堀、豊田・峯田、岩本・辻本、青木・山本のメンバーで優勝。入替戦の相手は、再び大阪経済大。双方互角の戦いで2－2となり5番勝負を任されたのは、チームで最も安定感のある田中・堀が勝利し、実に28年ぶりの「1部復帰」を果たした。リーグ戦で中軸の役割を果たした後衛の豊田と田中（共に兵庫県出身）は、一般入試で入学した選手、「立命館らしさ」を象徴する戦いであった。なお、堀は、全日本学生シングルスでベスト8に入り、また京都学連理事長でもあった田中と組んで京都学生で優勝した。学連理事長の優勝は、田中が最初で最後かも知れない。この秋は、関西六大学リーグ戦においても、秋季としては初、春季を含めても39年ぶりの優勝を果たした。

なお、この年に初代副部長として中村成夫氏が就任。就任早々に男子が2部リーグで優勝し、1部昇格という勝利の女神。選手の授業出席状況や単位の履修など学習面や生活面についてのサポートが始まった。中村氏は、可能な限り各大会にも同行し、リーグ戦の締めくくりには「家に帰るまでがリーグ戦。伝統と誇りある立命館大学体育会ソフトテニス部の選手らしく、節度ある行動を！」という名言を繰り返す。今日まで選手たちに熱い声援を送り続けている。

1998（H10）年の春には、17年間苦楽を共にした衣笠キャンパスからびわこ・くさつキャンパス（BKC）に移転。新入部員には、スポーツ選抜で奥田（中京高）、土井（中津商高）。そして、山下（鳥羽高）、船田（立命館高）、伊藤（東海大付仰星高）、島村（関西大倉高）が入部。春は、39年ぶりの1部リーグ戦。強気のオーダーに徹し、初戦の天理大に敗戦したものの他大学（同志社、桃山学、近畿、大阪商）全てを撃破し、準優勝。秋からは、高田商高出身第1号の岩本主将（現コーチ）、藤城主務のコンビで秋季リーグ戦に臨み4位。

1999（H11）年度は、スポーツ選抜では、森（高田商高）、曽奈（高田商高）のペアと山口（桜宮高）。そして、鈴木航（関西大倉高）、永井（綾羽高）が新入部員。春季リーグ戦は5位。西日本大学対抗はベスト8。全日本大学対抗はベスト16。ダブルスでは、青木・山下が全日本学生でベスト8に入り、全日本学生選抜インドアにも出場した。シングルスでは、森が西日本学生で準優勝。秋には、茶髪、長髪でパワフルな個性派の鈴木淳が主将、主務に高田商高出身第2号の青木と後衛の2本柱が幹部を務め、「一部校としての自覚を持たなければ！」と努力を積み重ね、秋季リーグ戦のオーダーは、1番に奥田・山下（全勝）、2番に森・曽奈、3番に岩本・桝谷、4番に鈴木淳・山口（4勝）、5番に青木・山本（全勝）で5戦全勝。初めて関西の大学の頂点に立った。我部が創部80周年の年である。関西学生選抜インドアにも、青木・山下、岩本・山本、奥田・桝谷が出場した。

… 第4期黄金時代の到来 … 2000-2002

2000（H12）年度の新入部員は、スポーツ選抜で現監督の山田（高田商高）、インターハイ準優勝の奥田和（高田商高）、徳山（三重高）。そして、塚原（紫野高）、山本（岸和田高）と実績のあるメンバーが顔を揃える。春季リーグ戦は5位。関西六大学春季リーグで優勝、西日本大学対抗はベスト8、全日本大学対抗はベスト16だった。ダブルスでは、関西、西日本、全日本の各大会で7人の後衛、5人の前衛が各々5 ～6回戦進出し、シングルスは、青木が全日本総合でベスト16、森が関西学生で3位等の戦績を残した。秋から奥田裕主将、土井主

務。秋季リーグ戦は5位。

新年度を迎えるにあたりテニスコートがオムニコートに整備されたが、その工事の間は瀬田川沿いの「大石コート」を使って練習をしていた。3月15日、練習に向かう途中で2回生の永井賢一郎選手（綾羽高）が交通事故に遭い逝去。サウスポーで元気のいい前衛だった。葬儀には、他大学からも多くの選手の参列があった。

2001（H13）年度は、スポーツ推薦でインターハイ個人優勝の橋本（高田商高）、準優勝の増田・野崎（姫路飾西高）のペア、3位で団体優勝の菰下（尽誠学園高）の4人と若山（愛知高）が入部。春季リーグ戦は、万全のメンバーを揃え関西学生の頂点を目指すが、2勝3敗の最下位。入替戦は、龍谷大に1－③で敗れ2部に転落した。西日本大学対抗は、奥田裕・山下、増田・山口、森・橋本で戦い、準々決勝は関西外大に③－0、準決勝は近畿大に③－1で勝利。決勝戦は、天理大にファイナルゲームが2試合と激戦になるが0－③、立命館初の準優勝である。全日本大学対抗はベスト16だった。ダブルスでは、関西新人で増田・奥田和が優勝。シングルスでは、森が関西学生、西日本学生で3位、全日本学生及び全日本総合でベスト16。奥田和が西日本学生準優勝。秋には、山口主将、鈴木主務で秋季リーグ戦に臨み、2部リーグで3試合しか落とさず5戦圧勝で優勝し、入替戦は春リーグ同様の龍谷大。奥田裕・山下、山本・山田、シングルス奥田で、龍谷大を③－0で倒し1部復帰を果たした。関西六大学秋季リーグ戦も優勝し、王座決定戦で明治大を④－3で制し、六大学王座初優勝を飾った。この王座決定戦では、女子も初優勝を果たし男女アベック優勝となった。王座決定戦に応援に駆けつけて頂いた梅垣先輩（命友倶楽部副会長）が、「びわこ・くさつキャンパスのテニスコートがオムニに整備された年に西日本大学対抗で準優勝したが、我々が全日本大学対抗で準優勝、翌年3位に入賞した時もテニスコートが新しくなった時だった。」と熱く語られたのが印象的だった。

2002（H14）年度のスポーツ選抜での新入部員は、インターハイ団体優勝した高田商高から西村、高校選抜を優勝した三重高から井口、賀喜（尽誠高）と3人の後衛。そして、加島（三国高）、西（東舞鶴高）、深堀（夢野台高）が入部。返り咲いた春季1部リーグでは、3勝2敗ながら準優勝、王座決定戦に出場するが予選リーグ2位だった。西日本大学対抗は3位、全日本大学対抗は40年ぶりにベスト8に進出した。ダブルスでは、関西新人の決勝戦で西村・橋本と増田・菰下が対戦し西村ペアが優勝。シングルスでは、森が関西学生3位、奥田和が西日本学生3位、全日本総合ベスト16に入った。秋季リーグ戦に臨む新幹部は、山田主将（現監督）、プレイングマネージャー山本主務のリーダーシップで3位。山田主将は、単に「厳しさで締付け」だけでなく、「お祭りムード」の中から明るさを引き出して選手の個性を発揮させるチーム作りを徹底し、関西六大学秋季リーグ戦を全勝優勝に導いた。

… 怒涛の快進撃 …2003-2006

2003（H15）年度は、スポーツ選抜でインターハイ団体を優勝した高田商高の勝村、江崎、と樫原（尽誠高）。そして、初の親子で部員となった大杉（鳥羽高）が入部。春季リーグ戦は、①井口･山田、②西村・橋本、③奥田和、④賀喜・江崎、⑤増田・菰下に勝村・野崎が加わり全勝優勝。王座決定戦では、準決勝で日本大に③－0で勝利し、決勝は、韓国の大邱カソリック大に1－③で敗れて準優勝。西日本大学対抗は、準決勝が天理大②－1、決勝戦は、中京大を②－0で制し見事に初優勝した。全日本大学対抗は、準々決勝で日体大に2－③でベスト8。

秋からは、橋本主将、野崎主務。秋季リーグ戦は、不動のオーダーで挑み全勝優勝を果たした。記念すべきオ

ーダーは、①井口・山田（4勝1敗）、②西村・橋本（5勝）、③奥田和（5勝）、④勝村・野崎（4勝1敗）、⑤増田・菰下（4勝1敗）の圧勝で春・秋連覇。中でもシングルスの奥田和は、春・秋通じて10戦全勝という圧倒的な強さで連覇に貢献した。ダブルスでは、西村・橋本が関西学生3位、近畿選手権準優勝、関西学生選抜インドア初優勝。シングルスでは、関西学生で山田が準優勝、菰下が3位、西日本学生で奥田和が3位、西村が全日本学生ベスト8、全日本総合でベスト16に進出した。

2004（H16）年度は、スポーツ選抜で椋本（高田商）・中野（上宮高）・大住（紫野高、岩崎太美夫元監督の孫）。そして、満屋（佐世保北高）が入部。アジアカップ広島国際大会で、実業団の雄NTT中国、天理大を倒し準優勝。決勝戦は、韓国の順天市庁に敗れたが、増田・菰下を中心に新1回生椋本・中野、勝村・大杉で編成したチームだった。3連覇を目指した春季リーグ戦は2勝3敗で5位。西日本大学対抗も振るわず、奮起を誓った全日本大学対抗でベスト8。ダブルスでは、西村・橋本が関西学生で優勝、西日本学生・近畿一般は3位。シングルスでは、西村選手が、西日本学生で優勝、全日本学生3位と健闘した。秋季リーグ戦は、西村主将、加島主務の新幹部で挑戦し、関学大に2－③で敗戦するも同志社大、近畿大、関西外大、天理大を倒し4勝1敗で、我武者羅に戦った成果が出て優勝。関西学生インドアでは、椋本・中野が出場し3位に入賞した。

2005（H17）年度は、スポーツ選抜で川渕（三重高）・勝川（高田商）・守法（開智高）が加わったが、橋本・増田・菰下・野崎という主力選手の卒業後だけに厳しい春を迎えた。春季リーグ戦は、1勝4敗で5位。関西学生はダブルスで西村・中野がベスト8。西日本学生は、大学対抗3位、シングルスで西村がベスト8。全日本学生では、大学対抗でベスト16、ダブルスで勝村・川渕がベスト16。秋からチームを支えるのは、勝村主将と創部以来初となる親子2代で主務を務める大杉。内に闘志を秘めリーグ優勝や王座決定戦準優勝の経験を持つ勝村主将を中心に戦った秋季リーグ戦は、3勝2敗で4位。関西学生選抜インドアには西村・中野、勝村・川渕、椋本・大住の3ペアが出場した。

2006（H18）年度は、鈴木（尽誠高）、有家（三重高）、山田（中京高）がスポーツ選抜で加わり、下平（鳴尾高）、中西（宮津高）、金子（柏崎高）も入部。春季リーグ戦は、2勝3敗で4位。西日本大学対抗はベスト8、全日本大学対抗は日本体育大に敗退しベスト16だった。秋からは、中野主将とプレイングマネージャーの大住主務。初陣となる秋季リーグ戦は、3勝2敗で3位だった。

… 立命館大学の新時代 …2007-2009

2007（H19）年度は、生田（三重高）、梅本（和歌山北高）、水谷（紫野高）がスポーツ選抜、そして石川（三重高）、石田（立命館高）が入部。立命館の新しい歴史が始まることとなる。春季リーグ戦は、同志社大に勝利したが、3勝2敗の4位。関西学生は、シングルスで椋本が3位。西日本大学対抗は、大商大、愛学大、関学大に勝ち準決勝で同志社大に敗れ3位。全日本大学対抗は、日本大に接戦の末2－③で敗れベスト16。秋季リーグ戦は、勝川主将と守法主務で臨んだが、2勝3敗の5位。関西学生選抜インドアは、有家・川淵も出場したが、石川・生田が優勝した。ダブルフォアードのスペシャリスト石川の本領発揮の瞬間だった。

2008（H20）年度は、スポーツ選抜でインターハイ団体優勝の向井（三重高）、小島（和歌山北高）、浦野（中京高）。そして、黒田（鳥羽高）、篠塚（佐原高）、田中（社高）が入部。関西学生は、ダブルスで有家・川淵が準優勝、勝川・向井が3位、シングルスは有家が準優勝と立命館が気を吐く大会となった。春季リーグ戦では、同志社大に勝つも最下位の姫路獨協大に負ける混戦の中、3勝2敗で準優勝。西日本大学対抗は、準決勝

で中京大に勝ち、決勝では、同志社大に梅本・生田が勝つも準優勝だった。全日本大学対抗はベスト16。この年、天理大から稲川（三重高）が3回生で編入した。秋からは、鈴木主将、山田主務。秋季リーグ戦は、3勝2敗で4位。東西対抗に川淵、梅本、生田が出場。関西学生インドアには、有家・川渕、勝川・向井、梅本・守法が出場し、有家・川淵が準優勝した。

2009（H21）年度のスポーツ選抜は、斎藤（東北高）、安藤（高田商高）、東方（和歌山北高）。そして、西川（神戸高）、奥野（宮津高）、久木（桃山学院高）が入部。春季リーグ戦は、初日に全て1－④で3敗。鈴木主将が浦野・梅本・有家・中西の4人の後衛と組み、シングルスは3人の起用等オーダーを工夫するも絶体絶命のピンチとなった。鈴木主将が2日目に勝負したオーダーに応えたのは、ベテラン中西と新人東方のペア。関大戦に1番、関学戦は5番の天秤で勝利し、2勝を挙げ5位にとどまった。西日本大学対抗は、有家・鈴木、小島・向井の奮起で3位。全日本大学対抗は2回戦敗退。秋季リーグ戦は、生田主将、石田主務の体制で臨み、オーダーは、安藤・水谷のダブル後衛や石田主務の出場など総力戦も、春に続き初日3敗。2日目に4回生の鈴木を投入し、最終戦の大商大に勝ち5位だった。リーグ戦では苦戦したが、ピンチに強い立命館の底力を発揮した年度だった。

… 全国制覇を目前に戦い続けた時代 …2010-2014

2010（H22）年度の新入部員は、スポーツ選抜で柏（中京高）、インターハイ団体準優勝の早川（三重高）、選抜・国体優勝の荒木（高田商高）、宮本（近大付和歌山）、そして、浅野（紫野高）、橋本（富岡東高）、安田（須磨東高）が入部。春季リーグ戦は、3勝2敗の準優勝。ダブルフォアード早川・向井は全勝のスタート。関西学生ダブルスは、早川・向井が優勝。西日本大学対抗はベスト8。ダブルスは、早川・向井がベスト8。全日本大学対抗では、3回戦の愛学大戦で生田主将が、斎藤とのペアで西日本学生チャンピオンに勝つ大殊勲を挙げ、準々決勝では、インカレ優勝回数の最も多い日大を③－2で下し、準決勝では、大学王座優勝の日体大を早川・向井が3チームを回して決勝に進出した。決勝戦は、連覇を続ける早稲田大に早川・向井が1勝するも1－③で準優勝だった。ダブルスは、早川・向井がベスト16。シングルスは向井がベスト8。秋季リーグ戦は、向井主将、田中主務の体制で臨み、3勝1敗で最終戦に同志社戦で勝てば優勝だったが、5番勝負で天秤のファイナルで負け2－③、3勝2敗で4位に終わった。このリーグ戦でも全勝した早川・向井は、第65回天皇杯で3位入賞。続く関西学生選抜インドアは準優勝し、東西対抗に生田とともに出場。全日本学生選抜インドアは、予選リーグ2位に終わるも、ルーセントカップで準優勝、全日本インドア選手権でも準優勝と日本の頂点の大会で大活躍した。早川・向井のペアは、ダブルフォアードと強烈なアンダーカットサービスを武器として、日本ソフトテニス界の新時代を切り開いた。

2011（H23）年度の春を迎えるにあたり、向井主将を精神的にも支えた小島副将の存在も大きかった。新入部員には、スポーツ選抜の榎（高田商高）、岩佐（三重高）に加え、石山、塩路（立命館守山高）、中村（光高）、木内（立命館高）、米田（赤穂高）、谷（宇部高）、石田（宇和島高）、高島（紫野高）など実績を持つ選手が数多く入部。春季リーグ戦は、シングルスで苦戦するが西川の明るいプレーが雰囲気を保ち、4勝1敗の準優勝で王座決定戦出場を決める。関西学生のダブルスは、早川・向井が準優勝。シングルスでは、早川がベスト4。近畿選手権（一般）で早川・向井が優勝。第31回大学王座決定戦に挑んだオーダーは、①斎藤・東方、②岩佐・荒木、③シングルスは柏裕介、④早川・向井、⑤小島・榎。予選リーグを1位で通過したが、準決勝で早

稲田大に惜敗、3位決定戦も愛学大に2－③と惜敗し4位。西日本学生は、大学対抗がベスト8、ダブルスは早川・向井が準優勝、シングルスは向井がベスト8。西日本選手権（一般）で早川・向井が3位、西村（京都市役所）・柏がベスト8に入った。全日本学生の大学対抗は、明治大、愛学大を倒して準決勝に進み、同志社大に1－③で敗れたが3位と健闘した。ダブルスは、早川・向井が準決勝、ファイナルで惜敗したが3位に輝いた。秋からは、関西弁にも馴染み始めた斎藤主将と西川主務。秋季リーグ戦は、早川・榎、斎藤・柏、岩佐・荒木、宮本・東方とシングルスに石山を抜擢、大接戦を繰り広げたが3勝2敗で3位。早川・向井は、関西学生選抜インドアで3位。全日本学生選抜インドアでも3位と健闘が続いた。東西対抗には、向井、早川、荒木、榎が出場した。

2012（H24）年度は、インターハイ個人準優勝の清原（上宮高）、3位の廣田（高田商高）、奥嶋（尽誠高）がスポーツ推薦、そして七條（西城陽高）、青木（東福岡高）の実力派が入部。関西学生シングルスは、榎が3位。春季リーグ戦は、早川・榎、清原・廣田、シングルスの石山が4勝し、関西外大に負けるも4勝1敗で優勝。大学王座決定戦では、①岩佐・榎、②斎藤・柏、③石山、④早川・荒木、⑤清原・廣田で仁荷大（韓国代表）等に勝ち、予選リーグを突破するが、準決勝で敗退し4位だった。西日本学生の大学対抗は、岩佐・榎、早川・荒木、清原・廣田で準決勝は愛学大に勝ち、決勝戦で同志社大に破れたが準優勝、ダブルスでは早川・榎が準優勝と活躍した。山口県で開催された全日本学生では、立命館大学宇部小野田校友会の皆様が炎天下の中にも関わらず2日間熱い応援をして頂いた。その声援に後押しをされ、岩佐・荒木、早川・榎、清原・広田のメンバーで、準々決勝は岩佐・荒木が日本大を回し、準決勝は日体大を③－1で下し、決勝戦で早稲田大に敗退するも準優勝と大健闘した。シングルスは、早川がベスト8に進出した。幹部交代で柏主将・浅野主務。JOC杯全日本ジュニアには清原・廣田が出場した。秋季リーグ戦は、清原・廣田の全勝、早川・榎、岩佐・荒木の4勝等が功を奏し、4勝1敗で優勝した。関西学生新人は、清原・榎が準優勝。関西学生選抜インドアは、早川・榎も出場するが、清原・廣田が準優勝に輝いた。東西対抗に早川、榎、荒木が出場、全日本学生選抜インドアに早川・榎が出場した。

2013（H25）年度は、鈴木（中京高）、インターハイ団体準優勝の三木（高田商高）がスポーツ選抜で入部、そして、山田（東邦高）、田辺（前橋商）、益田、増田（立命館高）、真下（立命館宇治高）、樫田（立命館守山高）という技術的にも体力強化にも様々な役割を果たす顔ぶれが入部した。関西学生シングルスでは、榎が準優勝した。春季リーグ戦は、1番岩佐・三木、2番早川・榎、3番石山、4番青木・奥嶋、5番清原・廣田のオーダーで3勝2敗の準優勝。全日本学生シングルスで早川が3位に入賞した。近畿選手権（一般）で早川・榎が3位。西日本学生は、山口県で開催された。大学対抗は、前年の全日本に続き立命館大学宇部小野田校友会の皆様が応援に駆けつけてくださり、熱い声援を送って頂いた。その応援に後押しされた選手は準決勝に進み、中京大戦の1番、岩佐・奥島が、観客の心を鷲摑みする厳しいラリーの応酬を繰り広げる激戦となった。岩佐と相手前衛の池田選手は、三重高時代から心が通じる仲、ファイナルデュースが続いたゲームの締め括りは、奥嶋の思い切り良い勝負で決した。2番の早川・榎が④－0で勝利し、決勝戦は関西外大となった。1－1の3番勝負を清原・廣田が④－0で勝利し優勝、宇部小野田校友会の皆様と優勝の喜びを噛み締めた。ダブルスは早川・榎が準優勝、中村・七條がベスト8に進出した。シングルスは、岩佐が3位に入賞した。全日本学生は、大学対抗の準々決勝で定期戦を結ぶ中央大に③－1で勝ち、準決勝で日体大に敗退し3位入賞。ダブルスでも、早川・榎が3位入賞。秋季リーグ戦は、榎主将と木内主務で臨み、榎主将がシングルスで全勝し、同志社大にも勝ち、4勝で

最終戦天理大との対戦を2－③で敗れ4勝1敗の準優勝だった。東西対抗は、早川、榎、岩佐、清原、廣田、奥嶋が出場。関西学生選抜インドアでは、早川・榎が3位入賞、中村・七條も出場した。全日本学生選抜インドアにも早川・榎が出場した。

2014（H26）年度は、スポーツ選抜でインターハイ団体優勝、個人3位の笠井（高田商高）、小澤（尽誠高）、大澤（東農大二高）、加藤（中京高）に加え、芝生（鹿児島実）、田村（東邦高）、定本（西脇高）と全て後衛の選手を迎えた。春季リーグ戦は、榎主将がシングルス、岩佐・奥嶋、笠井・三木、清原・廣田、鈴木・七條、小澤・谷のメンバーで関西外大に敗戦するが4勝1敗で優勝した。関西学生のダブルスは、清原・榎、笠井・三木が共に3位。第34回大学王座決定戦は、予選リーグを笠井・三木、鈴木・奥嶋、清原・廣田が全勝で勝ち抜き、準決勝で日体大に敗退するも韓国代表の忠北大に③－で勝利し3位に入賞した。西日本学生の大学対抗はベスト8。ダブルスは、1回生の小澤が七條とペアで3位に入賞した。全日本の大学対抗は、慶応大に負けベスト16。シングルスは榎がベスト8。秋からは、清原主将、プレイングマネージャーの青木でスタート。JOC杯に笠井が出場。秋季リーグ戦は、シングルスに大澤を使い、①小澤・七條、②笠井・三木、④清原・廣田、⑤鈴木・奥嶋の固定オーダーで3勝2敗の準優勝だった。関西学生新人では、笠井・三木が3位。関西学生選抜インドアには、清原・榎、岩佐・奥嶋、小澤・七條と3位入賞の笠井・三木が出場した。ジュニアジャパンカップに小澤が出場し、シングルスはベスト8。ダブルスはベスト16だった。

… 全国制覇への決意 …2015-2019

2015（H27）年度は、スポーツ選抜で坂口（岡崎城西高）、小倉（高岡商）の前衛に加え、清水（紫野高）、庄司（立命館守山高）と後衛が入部。関西学生シングルスは、小沢が3位入賞。春季リーグ戦は、笠井・三木、清原・廣田、シングルス大澤、後は後衛の青木、鈴木、小澤が前衛の奥嶋、七條、坂口とのペアで接戦を繰り広げたが、2勝3敗で4位。徳島で開催された西日本大学対抗はベスト8。全日本大学対抗に笠井・坂口、清原・廣田、小澤・三木で臨み、定期戦を結ぶ中央大を③－2で破ったが、準々決勝で日体大に敗れベスト8だった。秋からは、鈴木主将、山田主務の体制。幹部交代で多くのレギュラーが引退して厳しい秋季リーグ戦となるが、4回生の奥嶋、七條の出場を得て、2勝3敗の5位に留まった。関西学生新人は、笠井・坂口が3位に入賞した。

2016（H28）年度も前衛の強化を図り、スポーツ選抜でジュニアジャパンカップ優勝の大塚（和歌山北高）、インターハイ個人準優勝の杉山（岡山理大）、西畑（和歌山北高）と後衛の奥村（中京高）に加え、林（紫野高）、齋藤（東海大仰星高）、山口（立命館高）、山本哲、山田、平井（立命館守山高）、篠原（浜名高）、宮坂（横須賀高）、山本啓（廿日市高）と多くの部員が入部。しかし、主力の卒業が響き、春季リーグ戦は、初戦で天理大に敗戦し、3戦目はオーダー提出が遅れて棄権扱いとなり、ムードが沈んで5敗で最下位、入替戦も近畿大の勢いに押されて0－③で敗退し、2部降格となった。西日本学生の大学対抗は3回戦で中京大に1－②で敗れたが、ダブルスでは、笠井・坂口が3位入賞と健闘した。全日本大学対抗ではベスト16に入るが、法政大に敗退した。2部でのスタートとなった秋季リーグ戦は、小澤主将とオールラウンドプレーヤー田村主務。順調に勝ち進み、最終戦は創部百周年を迎えた関西大との全勝対決。2－2の天秤で芝生・西畑が迫力の勝利で全勝し、近畿大学との入替戦に臨んだ。1番の笠井・大塚が安定感のある勝利、シングルスで大澤が大接戦の末④－3で勝ち、主将の小澤・坂口が④－0で一部復帰を決めた。関西学生新人は、奥村・大塚が3位。関西学生選

抜インドアに笠井・坂口が出場した。　2017（H29）年度は、インターハイ団体準優勝の宮里（岡崎城西高）、選抜準優勝の北野（上宮高）、大塚康（西城陽高）の後衛がスポーツ選抜で入部、前衛は附属校から山本（立命館守山高）が入部。チームの組織力強化のため、この春から、2回生になった齋藤を主務に抜擢、3年計画で主務の重要性を構築する。1部に復帰した春季リーグ戦は、1・2回生で8人を投入するが1勝4敗で5位。西日本大学対抗は福岡大学に敗退しベスト16、全日本大学対抗は連覇を続ける早稲田大に1－③で敗退しベスト16だった。この秋からは、坂口が主将、主務は斎藤が継続。笠井、小澤という主力後衛引退の厳しい秋季リーグ戦は、坂口主将を中心にチームとして丁寧なゲーム運びを徹底した。接戦を展開するが初戦から2敗した後、苦手の関西外大を制し、結局2勝3敗で3位。関西学生新人は、宮里・山本が3位に入賞した。

2018（H30）年度のスポーツ推薦は、前衛で熊本（和歌山北高）と上野（文徳高）、後衛で選抜準優勝の古石（上宮高）。そして、杉山和（岐阜商高）や池内、堅田（立命館守山）、松本（明星高）、中矢（初芝立命館高）と層の厚い選手が入部。春季リーグ戦は、厳しい戦いが続き2勝3敗で4位。西日本学生の会場は長崎だったが、大雨特別警報の影響で開催地への交通機関が危ぶまれるため、男子部、女子部共に急遽予定を繰り上げて前夜に出発し、翌朝の伊丹空港発の便で長崎に到着した。他大学の殆どが、会場に着けないため大会は延期となったが、斎藤主務の経験からの英断により他大学より体調が整った状況で大学対抗に臨むことができた。結果は、2、3回戦、準々決勝、準決勝と各試合に前衛は、坂口、大塚勇、杉山、熊本、後衛は、奥村、林、宮里、北野、大塚康、古石と合計10人が出場し、準決勝で優勝した関西大に屈したが5年ぶりに3位入賞と健闘した。ダブルスは、奥村・杉山がベスト8。全日本大学対抗は3回戦で専修大に敗退した。秋には、大塚勇主将、副将に杉山が就き、主務は引続き齋藤。秋季リーグ戦は、林・西畑とシングルスの古石だけが固定で、後衛の奥村、大塚康、宮里、北野、前衛の大塚勇、杉山奨、山本、熊本がペアを変えながらも善戦したが初日は3敗。切羽詰まった2日目は、集中力が発揮でき2勝。結局、優勝した関外大に勝っても5位だった。関西学生選抜インドアに奥村・杉山が出場した。

2019（H31）年度は、スポーツ選抜で大谷（三重高）…母親は立命館大女子部を7部から2部への昇格に導いた時の主将小村、大杉親子に続き親子での部員第2号…選抜3位の玉井（高田商）、選抜準優勝の瀬川（上宮高）、堤（西城陽高）、早川（中京高）、近藤（紫野高）。そして、安達（松江南高）、大野、中田（立命館守山高）、永野（清教学園高）が入部。春季リーグ戦は、1勝4敗で5位に終わった。

秋から、宮里主将、山本哲主務。秋季リーグ戦は、初日に関西大・同志社大・関西学院大に3敗し断崖絶壁に立たされるが、2日目の関西外国語大学戦で、1番の大谷・熊本が圧勝、2番の宮里・生田は惜敗、3番シングルスの古石も惜敗。4番の大塚・上野がファイナルゲームを制し、天秤となった5番の北野・池内が、気迫の勝利で何とか1勝、最終戦の天理大に負け1勝4敗の5位に終わった。関西六大学秋季リーグ戦は、4勝1敗で2位。関西学生選抜インドアには、奥村・大塚勇、大塚康・熊本が出場した。

女子部の歩み

… 萌芽の時代 …1976-1976

女子部員は、1976（S51）年度卒業の小林妙子選手（山城高）を第1号に、1977（S52）年度卒業の白銀緑選手（岩国高）、柳屋恵美子選手（岩国高）、1979（S54）年度に山本仁恵選手（城北高）を送り出したが、女子部としての組織的な活動には至らなかった。しかし、京都府高等学校ナンバーワンの実績を持つ小林選手は男子部主務を兼任しつつ、大学から始めひたむきに努力した白銀選手とのペアで各大会にチャレンジ、続いて途中入部の柳屋選手とのペアで京都学生準優勝の戦績を残した。さらに、高校時代の後衛田中選手と組んで、京都府インドア選手権で優勝した。

… 女子部の創設 …

1988（S63）年度には、和歌山からインターハイに出場した山本（耐久高）、続いて田宮（仁愛女子高）、1989（H元）年度に中本（鳳高）、伊藤（塔南高）、大江（米子北高）、そして、3回生から山城（宝塚西高）と部員数も増えた。1990（H2）年度には、加藤（柳井高）、畑（豊津高）が入部し、3回生となった山本が初代女子部主将に就任。ここに女子部としての組織的な活動がスタートした。加藤が2回生となった1991（H3）年度には、新入生で高校時代のソフトテニス経験者を徹底的に調査し、ダイレクトメールで広く入部を呼びかける作戦を展開した。これが見事に的中し、北海道から九州まで、各県で上位に進出した鳥羽（琴丘高）、田川（佐世保南高）、大岩（田辺高）、大島（清水東高）、桜井（五条高）、大塚（唐津東高）、丸山（耐久高）、上坂姉妹（帯広柏葉高）の9人が入部。歴史を誇る男子部を圧倒する「凄まじい」パワーを感じる元気な部員が集まり、歴史の幕が力強く開かれた。

また、1983年に導入された「指定校推薦」は、文武両道で高校生活を頑張った受験生に立命館大学への新たな門が開かれたのであるが、この入試制度は、女子部において大きな力となった。

… 関西学生リーグに加盟 …1991-1992

1991（H3）年度、女子部は、関西学生リーグ戦登録に踏み切り、春季リーグ戦は、7部からスタートしてすぐに優勝、入替戦は相手の棄権で苦労なく6部へ。女子部2代目中本主将の下で秋も6部優勝し、大阪学院大との入替戦は②－0で5部に昇格した。

1992（H4）年度の春季リーグ戦は、5部の2位に留まったものの、秋季リーグ戦では、大学から後衛に転向した加藤主将が安定感を見せ5部で優勝し、入替戦で四天王寺大、兵庫教育大を撃破し4部昇格と一直線に昇格を続けた。この年の新入部員には、将来の女子部の「屋台骨」的存在となるムードメーカーの李（プール学院高）、島根県のエース小村（大社高）、迫力の悴山（三本松高）、奥村（大阪市立西高）、大岡（古座高）がいた。スポーツ選抜制度に頼ることなく、負けを知らない、パワー溢れる明るいチームに成長した。

立命館に女子部が誕生したことにより、女子も関西六大学が揃い、1990（H2）年から個人戦として行っていた大会が、1992（H4）年度に秋をリーグ戦として開催することとなり、第1回大会を見事に制覇した。その後、3連覇を果たすこととなる。

… 女子部第一期黄金時代を求めて …1993-1995

女子部の勢いは止まらず、1993（H5）年度も大物前衛の田中（新居浜東高）に土井（岡山城東高）、そして立命館高から横井、折原、平尾の3人が入部。春季リーグ戦も4部で優勝し、和歌山大との入替戦を③－0で勝ち3部に昇格。秋からは、強いリーダーシップを発揮した大将前衛の鳥羽が主将となり、手堅く勝ち続けた田川が主務の体制で秋季リーグ戦に挑み、早い動きで勝負強い平林、実力派双子ペアの上坂姉妹、安定感の桜井、強気で豪快な大塚、パワフルショットの丸山、丁寧さが定評の大島と誰もが何時でもレギュラーになれる9人が結束力の強い軍団としてムードも最高の状態に達する。3部でも優勝し神戸学院短大に③－0で勝ち2部への昇格を決めた。2部昇格を記念して、女子部初めての部旗が作られた。さらに、関西六大学秋季リーグ戦でも優勝した。

1994（H6）年度には、女子もスポーツ選抜により山口（鹿西高）が第1号として入部し、加えて、富永（立命館高）、佐藤（出雲高）が入部した。さらに一層勢いに乗り、春季リーグ戦も2部リーグでも優勝、1部との入替戦にまで駒を進めるが樟蔭女子大に0－②で敗れ、1部の壁を実感することとなる。秋からは、入部以来リーグ戦勝利を牽引してきた小村主将とパワーと切れ味が共存する李主務がチームをリードして秋季リーグ戦を戦い2位。関西六大学秋季リーグ戦は優勝した。

1995（H7）年度は、新入部員に小野（三木北高）、小田（草津東高）、岩瀬（京都精華学園高）、 木戸脇（比叡山高）、平井（京都成安高）を迎えた。春季リーグ戦は6位で入替戦となったが大阪府大に②－0で勝利し、2部残留。秋からは田中主将、笑顔の横井主務。田中主将の統率力は、部員全体の団結力を一層確かなものとし、秋季リーグ戦は2位だった。この年、京都学生大学対抗で初優勝、以後、京都では団体・個人ともに常勝のチームとなる。

… 1部リーグへのスピード昇格 … 1996-2000

1996（H8）年度には、スポーツ選抜第2号は森（今治北高）、池上（就実高）の2人、そして直原（瀬戸高）、本田（東舞鶴高）、宮崎（立命館高）、鈴鹿（立命館高）が入部した。森の運動能力と池上のセンス、直原の迫力と個性溢れる後衛が結集。さらに、当時2回生だった中村（高田商高）が入部した。春季リーグ戦は2部で優勝し、大阪体大との入替戦で0－②で1部昇格を逃す。秋季リーグ戦は、山口主将、富永主務で挑戦するが2位。

1997（H9）年度は、スポーツ選抜第3号でインターハイベスト8の田中（奈良育英高）のパンチ力も加わり、今川（立命館高）も入部。春季リーグ戦は2位。2部リーグにおいても、常時上位に位置するチームとなった。秋からは、中村主将、小野主務を中心に秋季リーグ戦で優勝するも、入替戦で樟蔭女子大に0－②。しかし、そのゲーム内容は、正に1部リーグ昇格が身近であることを予感させた。

1998（H10）年度は、スポーツ選抜でインターハイ団体準優勝の岩永（淀之水高）。そして、高橋（東舞鶴高）が入部。春季リーグ戦は2位。しかし、チームとしては、前衛・後衛のバランスもとれ、秋から幹部を任された直原主将、宮崎主務の下での秋季リーグ戦は2部で優勝、入替戦は樟蔭女子大。森・岩永、田中・中村、小田・小野のメンバーで②－0と圧勝した。前年秋の男子の悲願達成に続き、女子部初の1部昇格を実現した。1991（H3）年度から7年間での見事なスピード昇格であった。

1部でのさらなる飛躍を目指し、前田右門氏（京都市役所、現女子部監督）が1999（H11）年度より女子部のコーチに就任。ベテランプレーヤーとしての経験を活かした的確で拘りある技術面、精神面の指導が現在に至る

まで行われる。

1999（H11）年度は、スポーツ選抜で実力・個性共に定評のある上田（和歌山信愛高）とガッツが魅力の向井（今治北高）の2人と、古城（就実高）が強化され、1部リーグ初の春季リーグ戦は5位。秋には田中主将、今川主務のもと、明るさと踏ん張りで秋季リーグ戦4位。関西六大学リーグ戦も優勝し、王座決定戦では惜しくも早稲田大に1－②で敗れた。

2000（H12）年度は、新入部員がスポーツ選抜の岩下（和歌山信愛高）、高井（高田商高）、そして鎌田（立命館高）。春季リーグ戦は1勝4敗で5位。秋季リーグ戦は、岩永主将・高橋主務のもとで1勝4敗となり最下位。入替戦の武庫川女子大戦では、4回生の田中がシングルスに出て勝負を決め②－で1部残留となった。

… 地力を付け成長する女子部 …2001-2005

2001（H13）年度は、スポーツ選抜でインターハイ団体優勝の米田有美（淀之水高）、選抜優勝の小谷翔（広島安芸女高）、近畿個人準優勝の奥村（甲西高）が入部し、春季リーグ戦4位、西日本大学対抗も初のベスト8、全日本大学対抗もベスト16と順調に戦績を伸ばした。ダブルスでも小谷・向井が関西学生ベスト8や小谷・奥村で関西新人ベスト8。関西学生シングルスも小谷がベスト8と上位に入り始めた。秋からは豪快な上田主将と命友倶楽部も手玉に取る優れものの古城主務のコンビで幹部。チームカラーを一層色濃いものとし、秋季リーグ戦は5位だったが、関西六大学秋季リーグ戦を制し、第10回東西六大学王座決定戦で　早稲田大に勝ち初優勝に輝き、史上初の男女アベック優勝となった。

2002（H14）年度のスポーツ選抜では、インターハイ団体優勝の小谷洋（広島安芸女高）が入部。春季リーグ戦は、松蔭女子大、天理大に敗戦したものの、関西外大、滋賀女子短大、武庫川女子大に勝ち初の3位。若い選手の持ち味を引き出した上田主将、古城主務、向井副将の采配に軍配が上がった。西日本学生では、岩下・高井がベスト16。全日本大学対抗はベスト16。ダブルスもインカレで小谷翔・米田有美がベスト16。秋からは、岩下主将を中心に高井主務の丁寧なバックアップが光り、秋季リーグ戦4位、関西六大学リーグ戦で全勝優勝との実績を挙げた。

2003（H15）年度の春には、スポーツ選抜でインターハイ個人準優勝の米田有佳（淀之水高）、個人・団体3位の野村（立志館広島高）と一層の充実を図ることができた。小谷姉妹、米田姉妹と野村の5人とも舞鶴市出身であり、舞鶴市の小学校長もされた1969（S44）年卒の名手坂根章先輩の指導で育った選手達である。春季リーグ戦は、2勝3敗で4位。西日本大学対抗はベスト8、全日本大学対抗は、ベスト16。秋から小谷翔が主将を務め、米田有美主務との絶妙のコンビでチームを引っ張り、秋季リーグ戦は2勝3敗で4位。関西六大学リーグ戦で全勝優勝し、王座決定戦でも早稲田大を下し、2度目の優勝に輝いた。

2004（H16）年度は、スポーツ選抜で選抜優勝の榊原（立志館広島高）とインターハイ団体ベスト8の大村（淀之水高）が入学。春季リーグ戦は1勝5敗の最下位。入替戦では、大阪樟蔭女子大に②－で勝ち、1部残留。そのオーダーは、1番が小谷洋・米田有佳の妹チーム。2番で勝負を決めたのは、小谷翔・米田有美の姉チームだった。このリーグ戦でチームは奮起し、西日本大学対抗では、決勝で松蔭女子大に敗れたものの初の準優勝に輝いた。関西学生ダブルスでは、小谷翔・榊原が3位入賞。秋からは、小谷洋主将と2回生のプレイングマネージャー野村主務という体制で秋季リーグ戦に臨んだが、3勝2敗で3位。関西六大学リーグ戦で全勝優勝を果たしたが、王座決定戦では早稲田大に及ばなかった。

2005（H17）年度は、スポーツ選抜でインターハイ団体3位の新谷（広島女子商）と瀬戸口（草津東高）が入部、部員7人という状況の中で春季リーグ戦は4勝1敗で準優勝し、王座決定戦への出場権を得る。西日本学生の大学対抗はベスト16、シングルスで小谷洋は3位に入賞した。全日本大学王座決定戦では、予選リーグを通過し、準決勝で東海女子大に大接戦の末敗退するが、3位決定戦では、榊原・米田有佳、シングルスの新谷、小谷洋・大村が底力を発揮し、松蔭女子大に勝ち3位に入賞した。全日本学生は、榊原・米田有佳、新谷・瀬戸口、小谷洋・大村で臨んだ大学対抗で創部初の準々決勝に進出しベスト8と健闘した。シングルスは小谷洋が3位。秋からの幹部は、米田有佳主将と引き続き野村主務。秋季リーグ戦は、神戸松蔭大を倒すも3勝2敗で3位だった。

… 女子部の忍耐から基盤形成へ … 2006-2011

2006（H18）年度は、スポーツ選抜で、今井（高田商高）と佐藤（和歌山信愛高）。そして、伊與田（岡崎高）、赤澤（富岡東高）、山口（愛知淑徳高）が入部。春季リーグ戦は、厳しい展開が続き5敗で、天理大との入替戦。1番の榊原・米田有佳は、米田有佳主将の積極的なネットプレーに榊原が持ち味の深いボールと厳しい角度で④－0。シングルスの新谷は、緊張からか涙交じりのプレイボールでリードを許すが、応援に駆けつけた男子部のなりふり構わずの応援に励まされて本領を発揮し④－2。3番の野村・大村の出番はなかった。新谷は、関西学生シングルスで3位入賞。西日本大学対抗はベスト16、全日本大学対抗もベスト16。秋からの幹部は、大村主将と榊原主務。秋季リーグ戦は、1勝4敗で5位だった。

2007（H19）年度は、加村（尽誠高）、新宮（広島女子商）がスポーツ選抜で入部。春季リーグ戦は、関西外大のみに勝ち1勝4敗の5位。西日本学生は、大学対抗でベスト8、シングルスで新谷がベスト16。秋から主将を務めた新谷と主務の瀬戸口で秋季リーグ戦に臨み、シングルスに新宮、新谷、山口の3人が出場するなど工夫を重ねたが、最終戦の千里金蘭大に1－②で敗れ5敗で最下位。入替戦も関西外大を相手に天秤の勝負になったが、1－②で2部に降格となった。

2008（H20）年度は、スポーツ選抜で森（草津東高）、選抜優勝の廣澤（広島女子商高）に加え、黄瀬（草津東高）、杉野（富岡東高）、清水（甲西高）と心強い顔ぶれが揃った。関西学生では、今井・佐藤がベスト8。2部で始まった春季リーグ戦では、1番山口・伊與田、シングルスが新谷、3番新宮・佐藤の不動のオーダーで臨み5戦全勝で優勝、千里金蘭大との入替戦も不動のオーダーで臨み、一進一退の激戦で1-1の天秤勝負を新宮・佐藤が④－2で制し、応援に駆け付けた男子部員と共に感動の1部復帰を果たした。西日本学生では、ダブルスで、新谷・加村がベスト8。秋からは、伊與田主将と赤澤主務。秋季リーグ戦は、2勝3敗で4位。関西学生選抜インドアには、今井・佐藤、新谷・加村が出場した。

2009（H21）年度は、山内（淀之水高）、舛井（広島翔洋高）がスポーツ選抜で入学。春季リーグ戦は厳しい状況で5敗。5月5日の入替戦に向けたゴールデンウィーク中の練習に前々主将米田有佳や前主将新谷が駆け付け力強いバックアップ。チームは、持ち味を取り戻し、天理大に②－0で勝利し、1部残留を決める。西日本学生では、新宮・森がベスト16。秋からは、新宮主将、加村主務が幹部を務め、秋季リーグ戦に臨んだが、厳しい戦いが続き結局5敗。入替戦は、2番のシングルス山内は勝利したが、1－②で甲南女子大の1部昇格を許した。

2010（H22）年度は、橋田（宮崎商高）、篠原（和歌山信愛高）がスポーツ選抜で入学。春季リーグ戦は、2部リーグで滋賀短大、桃山学院大に勝ち、全てが②-1という大接戦であったが2勝3敗の4位。西日本学生の大学

対抗は、杉野・篠原、山内・森、新谷・舛井で臨み、岡山大、天理大、近畿大に続いて、準々決勝でも千里金蘭大を下し、関西学院大に屈するも3位と健闘した。シングルスは山内がベスト8、ダブルスも含め幅広い選手が活躍した。全日本学生はダブルスで山内・森がベスト16。秋からの幹部は、森主将と廣澤主務で秋季リーグ戦に挑戦。1番が新宮・森、シングルスは山内、3番が杉野・舛井の不動のオーダーで3勝2敗の3位。山内は、ジュニアジャパンカップシングルスでベスト8に入った。

2011（H23）年度は、スポーツ選抜でインターハイ団体優勝の中野（広島翔洋高）、滋賀県出身の鈴木（高崎大高崎高）。そして田中（網干高）が入部。春季リーグ戦は、森、黄瀬、杉野、山内、舛井、橋田、鈴木、田中の総動員で戦い、山内はシングルスで全勝するが2位。西日本学生は、大学対抗で1番に鈴木・黄瀬のダブル後衛、2番に山内・森、3番に杉野・舛井のオーダーで準々決勝の東海学園大も②－0で下し、神戸松蔭大に杉野・舛井が勝つも1－②。2年連続の3位入賞である。シングルスは、山内がベスト16。秋からは、1部リーグ復帰を目指して、ポイントゲッター山内主将、プレイングマネージャー舛井主務の体制。秋季リーグ戦は、初戦、2戦目も1－②で落とすが、山内がシングルスに回り3勝し、2位。2部優勝まであと一歩の状況が続いた。

… 1部復帰からさらなる飛躍へ …2012-2014

2012（H24）年度は、西岡（広島翔洋高）一人がスポーツ選抜。春季リーグ戦では、西岡・中野が1番、シングルスに山内、3番鈴木・舛井の固定オーダーで挑戦し、千里金蘭大戦を落とすが、4勝1敗で優勝。入替戦は桃山学院大、1番西岡・中野、2番シングルス山内がともに④－1で圧勝し、5シーズンぶりに1部復帰を果たした。山内主将、舛井主務は、1部復帰を実現させて幹部を橋田主将、田中主務にバトンタッチする。秋季リーグ戦は、3年ぶりの1部リーグ。幹部交代の初戦、春優勝の関西大に②－1で勝ち、勢いに乗り初日の第3試合関西学院大を落としたが、2日目最終戦の神戸松蔭大に優勝をかけて戦い、1－1の天秤のファイナルゲーム、マッチポイントも2本あったが結果は4位に終わったが、立命館大学の女子部の復活が見えた瞬間だった。関西学生選抜インドアには山内・中野が出場した。

2013（H25）年度は、スポーツ選抜で前衛の強化を図り、ハイスクールジャパンカップ3位の松本（中村学園）、澤井（光華高）が入部。春季リーグ戦は、西岡が松本と中野、シングルスに篠原、松本、鈴木。3番に鈴木・中野、田中・澤井、橋田・篠原と総力を挙げるが2勝3敗で4位。西日本学生の大学対抗は、2回戦で中京大学に敗退、ダブルスでは鈴木・中野がベスト8に進出した。秋季リーグ戦に向けた新幹部は、中野主将とプレイングマネージャー田中主務。1番に大将に西岡・中野、3番シングルスに鈴木、3番田中に松本と澤井がペア。天理大に勝利し、接戦を繰り広げるが、1勝4敗で5位。関西学生選抜インドアには、鈴木・中野が出場した。

2014（H26）年度は、後衛強化のためスポーツ選抜で産屋敷（和歌山信愛高）、山田（高田商高）。そして、説田（鶯谷高）、東浦（須磨学園高）の前衛が入部。春季リーグ戦は、西岡・中野を3番に置き、産屋敷、山田、鈴木と前衛の澤井が1番、シングルスは、鈴木、産屋敷、説田で全ての対戦が②－1となる激戦ではあったが1勝4敗で最下位。この年から入替戦は当日となり、対戦相手は関西外大。1番は、山田・澤井が④－2、シングルスの産屋敷は、大接戦のファイナルゲームを制し②－0で1部残留を決めた。近畿選手権（一般）で産屋敷・松本が松蔭女子大や東芝姫路を撃破し3位。西日本学生の大学対抗は、大将ペア西岡・中野を3番に、1番が産屋敷・松本、2番に鈴木・説田又は、山田・澤井。準決勝まで安定的に勝負を決め、福岡大に0－②で敗れたが、4年ぶりの3位入賞となった。全日本大学対抗は、2回戦の慶応義塾大戦で頼れる西岡・中野が3チームを回

し③－2で勝利。続く松蔭女子大は産屋敷・松本、山田・説田が共にファイナルゲームの大接戦を繰り広げるがあと一歩でベスト16。秋には、最上級生1人となる大黒柱の西岡主将、主務に2回生の澤井。秋季リーグ戦は、春と同様に全試合が②－1となる激戦も1勝4敗で最下位。入替戦は関西外大。1番西岡・説田が④－0で先勝、シングルスの山田が2－④、3番勝負は産屋敷・松本。ゲームカウント1－3からファイナルゲームに盛り返し相手マッチポイントを2本も凌ぐ激戦を制し、1部残留。この時、女子部初代山本主将の姿が応援席にあった。関西学生新人大会は、産屋敷・松本が3位。関西六大学リーグ戦も9年ぶりに優勝し、王座決定戦に出場した。

… 少数精鋭の時代から、総合力で戦うチームへ …2015-2019

2015（H27）年度は、スポーツ選抜で足立（脇町高）、塩田（和歌山信愛高）、吉田（昇陽高）。そして、増田（京都文教高）、都築（明和高）と後衛3人、前衛2人が入部。春季リーグ戦は、西岡・説田を軸に優勝した天理大に③－0で勝利するが、3勝2敗で4位。関西学生のダブルスは、西岡・説田が3位入賞。西日本学生の大学対抗では、西岡・説田、産屋敷・塩田、足立・松本のペアで関西大との準決勝まで勝ち進み、2年連続の3位入賞。シングルスで産屋敷がベスト16。全日本学生は、大学対抗でベスト8をかけ日本体大を追い詰めるも2－③でベスト16。秋からは、松本主将と引き続き澤井主務。秋季リーグ戦は、松蔭女子大、天理大、千里金蘭大に勝つも3勝2敗で3位。関西学生新人は、産屋敷・塩田が女子部史上初の優勝。関西学生選抜インドアは、3位に入賞した足立・松本と西岡・説田が出場した。

2016（H28）年度は、スポーツ選抜のインターハイ団体準優勝の染川（昇陽高）に加え、中本（四天王寺高）、遠藤（立命館守山）が入部。春季リーグ戦は、1勝4敗で最下位。入替戦は関西外大。1番の足立・説田が④－0で勝ち、シングルスの産屋敷はファイナルゲームの激闘で3－④、3番の山田・塩田は一進一退のファイナルのデュース、何本もの相手マッチポイントを乗り越え見事に一部残留を決めた。西日本学生は、足立・説田、山田・松本、産屋敷・塩田のオーダーで、準々決勝で千里金蘭大に勝利し、準決勝で天理大に敗退したが3年連続の3位入賞となった。全日本学生は、大学対抗でベスト8をかけ東京女子体大に3次戦までもつれるが2－③でベスト16。秋からの幹部は、説田主将と東浦主務。秋季リーグ戦は、足立・説田を大将に据え山田と産屋敷が塩田のペアとシングルス。2勝2敗の最終戦に染川を起用し結果は2勝3敗で5位。関西学生選抜インドアには足立・説田が出場した。

2017（H29）年度は、スポーツ選抜で後衛の梶尾（昇陽高）、浅田（高岡西高）は共にインターハイ団体3位。そして前衛の大西（須磨学園高）が入部。関西学生シングルスで梶尾が入部早々に準優勝。春季リーグ戦は、足立・説田、産屋敷・塩田とシングルスに梶尾で臨み、天理大、関学大、千里金蘭大に勝つが、関西大、神戸松蔭大に惜敗し3勝2敗で3位。関西学生のダブルスは、梶尾・説田が準々決勝から神戸松蔭大、関西外大と勝ち進み、決勝戦も松蔭女子大に勝ち初優勝。西日本学生では、大学対抗で準々決勝に進むが、松蔭女子大に1－②と惜敗しベスト8。ダブルスでは、梶尾・説田がベスト8、産屋敷・塩田がベスト16。全日本学生は、大学対抗で梶尾・説田、産屋敷・塩田と足立が山田と浅田をペアに勝ち進むが、日体大に1－③で惜敗しベスト16。ダブルスは梶尾・説田がベスト16。秋季リーグ戦は、足立主将、増田主務の新体制で、後衛とシングルスは、足立、梶尾、浅田。前衛は、塩田と染川がレギュラーで戦い、2勝3敗で5位。関西学生選抜インドアに梶尾・説田が出場した。

2018（H30）年度は、スポーツ選抜で矢式（広島新庄高）、湯浅（昇陽高）、橋本　（和歌山信愛）．そし

て、上野（鳥羽高）、一刈（光華高）、那須（立命館守山）が加わり、一層チーム力が充実。矢式は、1987（S62）年卒業の清住選手が母校の教師・監督として育てた選手である。関西学生シングルスでは、梶尾が3位。そして、優勝を目指した春季リーグ戦は、神戸松蔭大と関西大に惜敗し3勝2敗で3位。関西学生ダブルスは、梶尾・塩田が3位。西日本学生は、大雨特別警報のため1日延期となったが、大会前日に長崎に入ったため万全の態勢で臨むことができた。梶尾・塩田、足立・矢式、浅田・染川で勝ち進んだが、準々決勝で天理大に1－②で惜敗しベスト8。ダブルスは、梶尾・塩田が神戸松蔭大、関学大、関西大と圧勝し、準決勝まで進み3位。全日本学生の大学対抗は、西日本と同じメンバーで臨み、ベスト8をかけて関西大と戦ったがベスト16。ダブルスは、浅田・染川が3回戦以降は、3試合続けてファイナルゲームを制しベスト16に進出。シングルスは、梶尾が、3回戦の青山学大とのファイナルゲームを制してからは、日本体大、東京女子体大、準決勝の日本体大の尾上選手を④-3、決勝戦は東京女子体大菊池選手に④-1で勝利し、見事に初優勝を飾った。秋からの幹部は、染川主将、中本主務。秋季リーグ戦にチームが一丸となって挑む雰囲気も構築され、シングルスには梶尾、ダブルスは、浅田・染川と矢式・大西。神戸松蔭大、関西大、天理大、関西外大を撃破し、関学大とも1-1の3番勝負で、3-1までリードし、マッチポイントも取っていたが3-④、4勝1敗で準優勝。梶尾は、ジュニアオリンピックに出場しベスト8、ジャパンカップでは第3位となった。浅田・染川は、皇后杯に出場。関西学生選抜インドアには、梶尾・塩田、浅田・染川が出場。浅田・染川は、全日本学生インドアにも出場を果たした。

この年、学生シングルスで全国制覇した梶尾選手は、「京都市スポーツ大賞」を受賞、立命館大学からも表彰された。

2019（H31）年度は、スポーツ選抜で前衛の強化を図るため国体準優勝の隈元（中村学園高）。そして、川元（立命館高）、白井（聖ウルスラ学院英知高）、本田（大社高）が入部。関西学生シングルスは矢式が3位に入賞し、梶尾が優勝した。春季リーグ戦は、最終戦の神戸松蔭大との1－1の天秤まで優勝の可能性を残していたが、2勝3敗で5位。梶尾はシングルスで全勝している。西日本学生大学対抗はベスト8。ダブルスでは、梶尾・隈元が関西学生、西日本学生、全日本学生の3大会でベスト8に進出、シングルスでは、関西学生、西日本学生ともに、梶尾が優勝、矢式が3位に入賞、また、全日本学生で梶尾がベスト8に進出した。秋季リーグ戦は、梶尾主将、浅田主務の体制で臨んだが、初日に3敗し厳しい状況となった。2日目の初戦は同志社女子大、1番の浅田・隈元がファイナルゲームを制し1勝を挙げるも2番のシングルス梶尾がまさかの敗戦、天秤で矢式・大西が大接戦の末に勝ち、最終戦では優勝した関西大に勝って2勝3敗の5位となった。関西学生六大学秋季リーグ戦は4勝1敗で2位。関西学生インドア、全日本学生インドアには、梶尾・隈元が出場した。

★ 誇り高きチームに

1919（T8）年の創部以来、数々の黄金時代を築きながら、一方で4部最下位という厳しい戦いを凌いだ時代も経験した男子部、そして、女子部は、30年前の創部の7部から今日まで、男女共に1部リーグで活躍するチームにまで、徐々にではありますが階段を一歩ずつ登るように歩んで参りました。

この間に目を離さずにご支援を頂いた関東、東海、中国、四国のＯＢの方々、そして、京都の命友倶楽部役員の方々、30数年前の「最も厳しい時代」からずーっと現役を励まし続けて頂いたＯＢの方々、兄貴分として今もコートにアドバイスに来てくれている近年の卒業生。この全ての方々に支えられて今日の現役部員があります。また、具体的な活躍の紹介をできない数多くの選手や目立つことなくても今日のチームに成長するまでに欠かすことのできなかった選手の底力があればこその「今」があります。

そして、今日では、リーグ戦や西日本学生、全日本学生などの大会に数多くの選手のご家族のご声援があります。ＯＢ・ＯＧの応援も20人、30人と毎年のように増加して参りました。

2019年、令和元年の年に創部百周年を迎えるにあたり、チームの指導は峯田総監督（1998（H10）年卒）、男子部山田監督（2004（H16）年卒）、女子部前田監督（京都市役所OB）、岩本コーチ（2000（H12）年卒）の体制となりました。

前田右門監督と以前の男子部の脇野誠コーチは、共に京都市役所のベテラン選手でしたが、元命友倶楽部副会長で1998（H10）年に他界された児玉康成大先輩に対する「恩返し」との気持ちからのチームへのバックアップをして頂きました。

これまで力強くご支援頂いて参りました皆様方のお蔭をもちまして、立命館大学体育会ソフトテニス部は、スポーツ選抜や一般入試、指定校推薦、附属校等により入学・入部した選手が融合し、一人一人が持ち味を活かしながら「日本一」を目指す「誇り高きチーム」に成長して参りました。心より感謝申し上げます。

本百周年の「歩み」は、立命館大学の『体育会の歩み』や京都学連機関誌『コートサイド』、『ソフトテニス・マガジン』（ベースボールマガジン社）などの資料を参考にして綴ったものでございます。時代によって詳細な情報を把握しきれていないこともあり、バランスを欠く点もございますが、ご理解を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。（文責：水田雅博、編集：水田博之）